



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	個体の存在論とセラーズの絶対プロセス
Author(s)	白旗, 優
Citation	哲学, 52, 17-37
Issue Date	2018-12-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75421
Type	departmental bulletin paper
File Information	52_t3.pdf



個体の存在論とセラーズの絶対プロセス

白 旗 優

1 問題の所在

私たちが経験している世界は、時空に位置を占める物から成っており、そうした物はそれぞれに特性を持ち、時間の経過のなかで、特性を変えながらも持続的に存在する。私たちは、いわば常識として、世界についておおよそこのように理解しているのではないだろうか。時空に位置を占めるこうした「物」は、存在論的には個体と呼ばれているものの典型である。

本論文の目的は、こうした個体の存在論的理解に対して、それとは異なる理解の仕方を求めることにある。導きの糸とするのは、セラーズがカルース講義で提唱した絶対プロセスの存在論と⁽¹⁾、スアレスの研究者として著名なグラシアによる個体の存在論の整理である⁽²⁾。

最初に、セラーズが提唱した絶対プロセスの存在論を、セラーズの叙述にできるだけ忠実に紹介する。セラーズの議論は、次々と論点が移動していく弁証法的な議論となっているので、少し丁寧に読み解いていきたい。次に、個体の存在論の全般的な見取り図を得るために、グラシアによる個体の存在論の整理と、グラシア自身の立場を紹介する。グラシアの整理は、スコラ哲学での議論を存分に踏まえつつ、古代から現代にわたる個体の存在論を体系的にまとめたものであり、参照枠として最適であると思う。第三に、グラシアの立場から得られる個体化された特性という考え方について、時空と時空構造の役割を重視する観点から少し自由に論じておく。最後に、それまでの議論を踏まえて、セラーズの絶対プロセスの存在論的な特徴付けを試みたい。

2 セラーズによる絶対プロセスの存在論

2.1 出来事への言及を含んだ文の分析

セラーズが出発点とするのは、「出来事」を表す2つの言い方についての分析である⁽³⁾。主語プラス述語という構文をもつ *Socrates runs* といった文で表される事実は、動詞を動名詞化して主語とした

A running by Socrates is taking place

という文で表すこともできる。セラーズはこの両者の関係を、*Snow is white* と

Being white is exemplified by snow

という形容詞句を名詞化して主語とした文との関係になぞらえて分析することを提案する。後者は *That it is white is true of snow* という構文を深層的にはもっており、単称名辞が '*is white*' と結合して形成される文は、その単称名辞が '*snow*' であるときに真である、という主張として理解される。セラーズの表記法では、これは

'x is white' is true '*snow*'/'*x*'

と表される。基本的な戦略は、抽象的な単称名辞を含む文を、語句についての文として解するということであり、元の文の主張は、深層的にはその語句から形成される文が真であるという主張として解されることになる。そうすると、*A running of Socrates is taking place* は単純に '*Socrates runs*' is true と解され、*Socrates performed a running* は

'x runs' was true '*Socrates*'/'*x*'

と解されることになる。こうした分析のポイントは、「出来事」への言及を含んでいるように見える主張は、主語プラス述語という構文をもった文についての主張として解することができ、その元になる主語プラス述語構文の文は、具体的な対象としての個体への言及しか含まないというところにある。

以上の分析の存在論的な含意に戻ろう。次に注目して強調しておきたい

のは、この分析によれば、語り得るものは何であれ対象であるという極めて広い意味を除いて、出来事は対象ではないということである。したがって、Socrates' runningに関わっている固有の対象は、ソクラテスその人と、砂とか砂利とかいった問題視されることのない対象だけである⁽⁴⁾。

次の節で考察する限定を付けた上ではあるが、**出来事**についての語りは、変化するものについての一つの語り方である。したがって、変化する物と人に対して、**さらに付け加わる**出来事といったようなものはない⁽⁵⁾。

2.2 議論の転換

以上の分析は、The Ving of Sという形の表現を、S Vsという形の文のメタ言語的な変形として解するものである。しかし、こうした分析が適用できない事例が存在する⁽⁶⁾。それはIt thundersといった形式的な主語を使った文によって表される主張である。セラーズは、ここからC. D. ブロードが導入した「絶対プロセス」の概念に依拠して議論を進める。

ブロードは、彼が「絶対プロセス」と呼ぶものの概念を導入する。それは主語を持たない（つまりは対象を持たない）出来事であるといってもよいだろう。これらは、私たちが考察してきているような文、すなわち論理的な主語を持たないか、飾りの論理的主語しか持たない文によって、その成立がまずはじめに表現されるようなプロセスである⁽⁷⁾。

つまり、絶対プロセスを表す基本的な文はS Vsという構文ではないし、真正の論理的主語を持つそうした文に言い換えることもできない。

しかし、言い換えることはできないとしても、たとえば稲妻を電子の運動として捉えることで、絶対プロセスを、変化する物をもとにして説明するこ

とはできるのではないだろうか。しかしながら、そうした説明は、絶対プロセスを含むような一つの存在論的枠組みを、変化する物だけからなるもう一つの存在論的枠組みに総体として還元することになるのだとセラーズは言う。そして、ここで視点の大きな転換が行われる。

言うまでもないが、【説明という】後者の考えにコミットすることは、別の意味での「還元」によって、主語を持ったプロセスが、主語を持たないプロセスに還元できるという立場とも、両立することができる⁽⁸⁾。

実際、次のように論じることでもできるだろう。つまり、2つの理論は事実的な内容—それが正確には何であれ—としては同じなのだが、一方は変化する物という「文法」をもち、他方は絶対プロセスのそれをもって
いるのだ⁽⁹⁾。

前者は「実体の存在論」、後者は「プロセスの存在論」と呼ばれている。

2.3 絶対プロセスの特徴づけ

セラーズは、絶対プロセスの特徴を、音を典型的な事例として、次のように取り出している⁽¹⁰⁾。まず、鐘とそれが生み出す鐘の音は区別しなければいけない。問題としているのは、生み出された鐘の音そのものである。次に、音は、標準的な状態においては標準的な観察者に音の体験を引き起こすが、それ以前に環境にそれ自身として存する。環境にそれ自身として存する音が、問題としているものである。

また、たとえばbuzzという動詞は、ブンブンという音を生み出す蜂の飛行を表すが、そこから派生するbuzzingという形容詞はブンブンという音の内在的特性を表すこともできる。そして、音の内在的特性は、そうした音を生み出す典型的な原因によって同定されはするが、独立したものであり、たとえ蜂の飛行によって生み出されなかったとしても、ブンブンという音は存

することができる。

さらに、音は鳴り始め、鳴り終わる。そして、音が鳴り始めるのは、音以外のなにかが鳴り始めるのではなく、音自身が鳴り始めるということであり、その意味で、絶対的に生起するということである。同様にして、音が鳴り終わるのも、絶対的に消滅するということである。また、音が鳴っているあいだには、たとえば音高の変化といった形で、鳴っている音は変化し得る。

2.4 動詞によって表される世界

以上のようにして特徴付けられる絶対プロセスを表す言語表現は、すでに述べたように形式的主語と動詞からなる文である。たとえば、ブンブンという音が鳴っていることは、*It buzzes over there*と表すことができる。

しかし、こうした事実は、*There is a buzzing over there*という動名詞を使った文で表すこともできる。最初に提示した分析では、*A running of Socrates is taking place*は*Socrates runs*のメタ言語的な変形として解された。それにより、存在論的には出来事といったものはなく、変化する対象だけがあるということになった。同様に考えると、*There is a buzzing over there*は、*It buzzes over there*のメタ言語的な変形として解されることになる。そして、存在論的には、絶対プロセスだけが関わっている。

さて、そもそも *A running of Socrates is taking place* を、*Socrates runs* によって分析したのは、両者が同じ事実を表していることを認めた上での話であった。しかし、動名詞を主語や目的語とした文が、絶対プロセスによって分析できるのであれば、*Socrates runs* も、絶対プロセスによって解釈される可能性が開かれることになる。

セラーズは、そこで発想を飛躍させ、論理実証主義での中立的一元論を振り返りつつ、すべてを絶対プロセスに還元する存在論を構想する。

こうした考えは魅惑的な含意をもっている。実際、極めて簡単な素描で

しかないにせよ、私たちは真にヘラクレイトスのな存在論を手にしたことになるのだ。つまり、パンタ・レイである。**対象**といったものはない。世界は、進み行くことの、進み行き続ける織り成しなのである⁽¹¹⁾。

3 個体の存在論

ここで見通しをつけるために、個体の存在論的理解に関する様々な立場を、グラシアによる整理を通じて概観しておく。また、グラシア自身の立場も、後の議論の出発点を確保するという意味合いもこめて、紹介しておく⁽¹²⁾。

個体の存在論的理解は、それと対照される普遍の存在論的理解との関わりで得られるので、実際には、個体と普遍の両者について考えることになる。グラシアは、伝統的な実念論および唯名論と、両者を折衷した折衷論の3つに存在論的立場を大別する。それぞれの中で、個体と普遍をどう理解するかによって、さらに立場が区分される。

3.1 実念論と唯名論

実念論は、普遍の实在性を認めた上で、世界は本当は普遍だけから成っているとする。これはさらに超越の実念論と内在的実念論に分けられる。

超越の実念論は、プラトンが代表者とみなされるような立場である。真に实在性をもつのは思考によってとらえられる普遍のみであり、通常は個体とされる感覚的な経験的世界に属するものは、本当の意味では存在しないとされる。個体は普遍の幻影でしかない。内在的实在論は、これに対して、感覚的な経験的世界に属するものにも实在性を付与しようとする立場である。ただし、通常は個体とされる感覚的経験的世界に属するものは、本当は個体ではなく、特性を束ねた普遍の束であり、それ自身も普遍であるとする。

唯名論では、世界は個体のみから成っており普遍は存在しないとされる。グラシアは、まずここで、個体をそのまま個体として前提とする立場と、個

体はなにか他のものから派生して得られているという立場に、唯名論を大別する。前者は、本質的唯名論とよばれ、後者は派生的唯名論とよばれる。

本質的唯名論では、普遍はいかなる仕方でも存在しないので、他の立場では普遍によって担われるとされる機能を果たすなにかが必要となる。それがなにであるかによって、本質的唯名論はさらに細分されることになる。グラシアは、トークニズム、語主義、概念主義、類似主義、集まり主義の5つを挙げている⁽¹³⁾。

派生的唯名論は、個体はそれ自身とは異なる何らかの原理もしくは要因によって成立しているとする立場であり、典型的には、普遍である「馬性」が個体化して、個体である「この馬」を成立させているという発想を基本とする。元になっている普遍の実在性をどの程度認めるかによって、グラシアは、弱い派生的唯名論と強い派生的唯名論に分けている。

弱い派生的唯名論、もしくは「穏健な実念論」は、以下のようなものである。本性と言われているのは、普遍と理解してかまわない。

この立場は、次のような考え方を堅持する。個体化されたとしても、本性といったものは、なんらかの一性と有（存在というわけではないが、なにがしかの存在論的な地位）をもつ。そしてこれは、そうした本性が個体としてもつ一性と有に付加されるものである⁽¹⁴⁾。

これは、スコトゥスの立場に非常に近いとされている。一方で、強い派生的唯名論は、個体化された本性は、個体もしくは概念としての一性と有以外には、一性と有を持たないとする。

3.2 折衷論

個体と普遍の両方に対して実在性を認める立場を、グラシアは折衷論と呼んでいる。ここでは、普遍とは異なる個体をどう理解するかに応じて、3つの見解がある。それらはそれぞれに、個体を、裸の個物、特徴付けられた個

物、特性の束という観点から理解しようとする。個物といているが、個体と同じとみなしてかまわない。

まず、裸の個物の立場は以下のようなものである。2つの異なる個体は、特性を完全に共有しているかもしれない。しかしそれでも、2つの個体は個体として区別される。なぜなら、個体は、普遍であるさまざまな特性に加えて、普遍ではないなにかを、その構成要素としているからである。このなにかは、普遍ではないので個体であり、しかもいかなる特性ももたない個体である。この意味で、通常の個体のいわば核になっているこうした個体は、裸の個物と呼ばれている。

私たちが経験する個体は、裸の個物と、普遍である諸特性から構成される複合的なものである。そして、個体の個体としての同一性は、その核となっている裸の個物の同一性に由来し、異なる個体が何らかの観点で同じとみなされるのは、それらが同じ特性を共有しているからである。

ところで、裸の個物は特性をいっさいもたないので、認識は特性の認識を介してのみ可能であるとする限り、いっさい認識することはできない。裸の個物は、理論的に要請されるが、経験的には不可知のものとしてとどまる。この状況に対する返答としてあるのが、個体を特徴付けられた個物として理解する立場である。特徴付けられたというのは、特性をもつということであるとしてかまわない。

個体は、それが個体である限り、なんらかの特性をもっている。しかし、個体は単にそれが持つ特性だけで尽くされるわけではなく、特性とは別に個体を個体たらしめるなにかを付加的にもっている。しかしながら、そのなにかを独立したものとして取り出すことはできない。以上のように理解された個体が、特徴付けられた個物である。

特性の束の立場は、前者の二つの立場と根本的に異なる。特性は普遍はあるが、特性の束それ自体は、普遍ではなく個体であるとされる。この立場は、個体を特性の束とする点で、先に内実論と呼んだ立場と同じであるが、束自身に個性を認めることで、個体と普遍のいずれにも実在性を認

める折衷論となる。一つのやり方は、束の中に普遍である特性だけではなく、時空座標を含めることである。

複数の個体（すなわち特性の束）は、それらが異なる特性を含むがために相異なる。究極的には、この立場の何人かの支持者が述べてきたように、複数の個体は、それらが同じ時空座標を共有できないがために相異なるのである⁽¹⁵⁾。

3.3 グラシアによる問題の所在の診断

以上、グラシアによる存在論的立場の整理を紹介してきたが、グラシア自身の考えについても、まとめておこう。まず、グラシアは、個体と普遍がなにを意味しているのかについての理解が混乱しており、そのために議論の收拾がつかなくなっているとする⁽¹⁶⁾。

グラシアは、混乱している伝統的な理解に対して、非事例化可能性と事例化可能性による個体と普遍の区別を提案する。たとえば、人間という種は、ソクラテスという事例をもつので、普遍である。一方で、ソクラテスは、ソクラテスとは別に事例となるようなものは持たないので、個体である。

先に見てきた様々な立場は、同じ特性を共有する複数の個体が、なぜ個体としては区別化されるのか、という伝統的な観点の一つから個体と普遍を考えているものが多いようである。しかし、本論文でも、グラシアによる非事例化可能性と事例化可能性という基準をさしあたり採用して、以後の議論を進めていきたい。

「事例化」という考えは、派性的唯名論についての議論で言及された「個体化」と深く関わっている。事例化可能なものが、事例化可能でないものに事例化するときに、個体化と言われることになるのだと思う。

3.4 個体と普遍についてのグラシアの立場

非事例化可能性と事例化可能性による区別を採用すると、通常は普遍とさ

れる特性についても、その個々の事例は個体であるということになる。たとえば、「赤」という色は普遍であるが、その事例となる「いま手に取っているペンのインクのこの赤」とか、「いま食べているイチゴのこの赤」といったものは、個体である。現代の分析哲学で、抽象的個物とか、トロープと呼ばれているものがこれにあたる⁽¹⁷⁾。ストローソンが示唆した特性的普遍の現れも、基本的にはこれと同じようなものである⁽¹⁸⁾。以下では特性の事例として得られる個体を、個体化した特性と呼ぶことにする。

これに対して、人間の事例として個体と認められるソクラテスのような個体と、ソクラテスの髪の毛の黒色のような特性の事例とのあいだには、やはり違いがあるのではないかという反論はあり得る。

しかし、事実として、「人間」と「髪の毛の黒色」のあいだには、一方が個体となり、他方はそうなり得ないことを説明するような顕著な違いがあるようには見えない。この事実は、ほぼ間違いなく、裸の個物の支持者が、次のように主張する助けとなるだろう。つまり、「人間」が個体となるわけではなく、「人間」がいわば付着する、もしくは「人間」がそこで事例化される、裸の個物が個体なのだ⁽¹⁹⁾。

とはいえ、グラシアは裸の個物をまったく支持しないので、結局のところ、「人間」と「髪の毛の黒色」のあいだにあるのは、複雑さの違いでしかないとする。つまり、「髪の毛の黒色」は一つの特性であるのに対して、「人間」は特性の束ということになる。この点については、後でまた省みることにしたい。

また、グラシアは、普遍は直接的に経験できないので、経験によって普遍の存在を確証することはできなく、特定の普遍を定義によって定めても、それは存在については中立的なままにとどまるので、普遍は存在するとも存在しないとも言えないとする。

さて、個体化した特性を認め、「人間」と「髪の毛の黒色」のあいだには複雑さの違いしか認めないということであれば、ソクラテスのような個体は、個

体化した特性の束ということになるはずである⁽²⁰⁾。個体化した特性とその束を個体として認める存在論は、普遍には「存在」が適用できないとすることも付加すれば、先の分類での派生的唯名論になるだろう。実際、グラシアは、自分の立場は強い派生的唯名論とほとんど同じであるとしている。議論を先取りして述べると、セラーズの絶対プロセスも、個体化した特性という観点から理解できるのではないかと思う。

4 個体化した特性と局所的時空構造

ここで、上で述べた個体化した特性について、グラシアから少し離れて自由に論じておきたい。個体化した特性の束という考え方を、その部分性によって際立たせた後に、現実の時空の個性を、根本的な個性の原理とすることと、時空を規定する時空構造に埋め込み可能な局所的時空構造に、基本的な存在論的役割を担わせることを提案する。

4.1 特徴付けられた個物vs.個体化した特性の束

ソクラテスのような個体を、個体化した特性の束として解する立場に対しては、そうした立場は、特徴付けられた個物を基本とする存在論と、実質的にほとんど同じなのではないかという疑念が生じるかもしれない。

実際、両者ともに、個性と特性を一体化したものが個体だと言っているわけなので、同じ事柄を異なる観点から述べているだけのようにも思える。しかし、違いを見出すこともできる。

個体化した特性の束としてソクラテスを理解すると、ソクラテスの髪の毛の黒色は、それを構成する要素ということになるだろう。そして、両者とも、それぞれに存在が認められる個体である。他方で、特徴付けられた個物の立場では、ソクラテスの存在はもちろん認められるが、ソクラテスの髪の毛の黒色は、独立した個体として認められることはないだろう。

そうであるとする、特徴付けられた個物と特性の束の相違は、前者がす

すべての特性を完備した個体だけを個体として認め、その一部だけからなるものはもはや個体ではないとするのに対し、後者は一部の特性だけからなる束も個体として認めるという点に見出せる。

つまり、すべての特性を備えた完全な個体のみを認めるのが、特徴付けられた個物の立場であり、その部分からなるものも個体として認めることが可能なのが、特性の束の立場であるとしておきたい。

4.2 個体化の原理

とはいえ、個体化された特性とその束を基本にする存在論の最大の問題は、そもそも「個体化」の意味が不明瞭なことである。特徴付けられた個物でも、個体を個体たらしめている核は、やはり不明瞭ではあるが、独立した存在ではないとしても裸の個物的なものを措定はしている。

裸の個物的なものとしてではなく、個体化をもたらしものとして、伝統的に繰り返し提案されてきたのは時空での位置である。しかし、たとえばグラシアは、次の問題を指摘している。

第一のそして最も顕著な問題は、次の点にある。この見解は、物の実体的な特性の一つ（すなわち個性）を、時空という偶有的な特性もしくは関係によって説明しようとしている。物が空間を占め時間の中にあるということは、物の構成の後にくるように思える。つまり、物の個性は、論理的にも形而上学的にも、その時間性と空間での位置に先立つようである⁽²¹⁾。

そして、本質と偶有性を区別する立場をとるとすると、時空での位置が個体の同一性を決定するものである限り、時空での位置は個体にとって必然的な特性であることになってしまうが、時空での位置は個体にとっては偶然的であるように思えるので、上記の反論はより効果的なものになるとしている⁽²²⁾。

本論文では、個体が個体であるのは、それが時空の中に現れる限りであるという立場を堅持したい。そのために、個性性と時空構造について、グラシアとは異なる視点を提示することを試みる。

4.3 個性性についての提案

唯名論を根本的なところで支えているのは、存在するものは、感覚的に経験されるものであり、感覚的に経験されるものは、すべて個体として経験される、という直観だろう。実念論は、感覚的に経験されるのではないものがあり、本当の実在であるとする。しかし、そうしたものは普遍的なものとされるので、個体と感覚的经验の結びつきを否認しているわけではない。

そこで、本質的になにかが変わるわけではないが、議論の組み立て方の一つとして、現実的な経験的世界の存在と唯一性を、すべてに先立つ前提とし、個体の個性性は、そこから導かれるという立場をとってみたい。私たちが生きている「この世界」の「これ性」だけは議論の余地がなく認めて、個体は、「この世界」に帰属することで、個性性を有すると考えるわけである⁽²³⁾。

さて、個々の個体は「赤色」のような特性をもつが、全体としての世界はもちろんこうした特性はもたない。しかしながら、現実的な経験的世界は時空的な構造をもつ。あるいは、現実的な経験的世界は時空構造を特性としてもつ、と言ってもよいだろう。すると、「ソクラテスの髪の色」が、普遍である「黒色」の事例で、そうしたものとして個体であるのと同じように、現実の時空は、普遍である時空構造の事例であり個性性をもつとみなせる。

「この世界」で実現されている時空構造、すなわち現実の時空は、ただ一つのものである。そこで、現実の時空の個性性は、すべての個体の個性性に先立つものとして、はじめから認めてしまっただろうか⁽²⁴⁾。

ただし、現実の時空で位置を占めることだけが、「この世界」に属することの内実を尽くしているとも思われない。一つの特徴付けとしては、因果的役割があるだろう。個体は、「この世界」での因果的役割をもつという意味で、「この世界」に属している。個々の個体は、因果的役割をもつという仕

方で、現実の時空に位置を占めることで、個性性を有する。

4.4 実体性の基盤としての局所的時空構造

ところで、時空構造を考えるとときには、その部分的な構造を考えることもできる。以下ではそれを、局所的時空構造と呼ぶことしたい。現代の物理学でそうしているように、時空構造を多様体として考えるのであれば、多様体はいくつかの時空構造の貼り合わせとしてできているので、局所的な時空構造を考えない方が不自然である。局所的時空構造は、それが時空において事例化可能であるという意味で普遍とみなしてよいと思うが、現実の時空の一部として事例化されている限りでは個性性をもつと考えたい⁽²⁵⁾。

さて先に、個性性の原理を時空での位置とする見解に対するグラシアの批判を見た。また、個性性された特性を認める見解に対して、人間の事例であるソクラテスと、黒色の事例であるソクラテスの髪の色黒色のあいだには、やはり違いがあるのではないかという反論があることも見た。

個性性の原理を時空での位置とすることに対するグラシアの批判は、アリストテレス的な実体の構成で言えば、時空での位置は偶有性にしかならず、本性には含まれないということである。ソクラテスと、ソクラテスの髪の色黒色の違いは、アリストテレス的な実体と、それを特徴づける特性の違いということになる。

ところでアリストテレス的な実体の一つの理解では、特性は基盤である基体*に*いわば「付着」している。しかし、こうした実体のイメージは、基盤を局所的時空構造と解することで、個性性の一つ手前のものとして理解できるのではないだろうか。

たとえば、白と黒のマス目からなるチェッカー盤を考えてみよう。普遍である白色は、チェッカー盤の盤面の図柄の中で位置をあたえられることで、他と区別可能という意味で個別化される。普遍である黒色についても同様である。白と黒が盤面に貼り付いている、という形容もできるだろう。

しかしながら、盤面の図柄は、世界中にこれまで多数存在してきたチェッ

カー盤から明らかなように、事例化可能であり、したがって普遍である。そして、盤面の図柄は、白と黒という特性と、局所的時空構造の組み合わせとして理解するのが、もっとも自然であるだろう。

局所的時空構造が付与されることで、「黒色」のような特性は、それ自身とは区別されるようになる。また、普遍としての局所的時空構造が付与されても、現実の時空における位置が指定されるわけではない。そのため、現実の時空における位置は「偶有的」なままにとどまる⁽²⁶⁾。

5 絶対プロセスの存在論的な位置付け

最後に、絶対プロセスの存在論を、個体化した特性を基本とする存在論として、位置付けることを提案したい。ただし、セラーズは、絶対プロセスの「瞬間性」を述べ、さらにその利点として重ね合わせができることを挙げている。こうして点についても、少し触れておく。

5.1 雷鳴の存在論

絶対プロセスは、It thundersのような形式的主語をもった文で表されるものであった。そうした絶対プロセスは、それを生み出す原因となっているものとは区別され、心的なものではなく環境の中に存在し、内在的な性質をもち、絶対的に生起し、消滅し、転変する。

たとえば、雷鳴を絶対プロセスとして考えてみよう。雷鳴は、その特有の音の鳴り方によって特徴付けられ、さらにはそうした特徴を持った音そのものである。つまり、雷鳴はその特徴を失ってもなお雷鳴であり続けることはできない。雷鳴は、その特徴とともに生起し、その特徴が消滅すれば消滅する。また、雷鳴は音の鳴り方の変化そのままに、次々と変転していく。

こうした記述に該当するものを、存在論的枠組みの中に位置付けるとすると、個体化した特性の枠組みが最も適当であるように思われる。雷鳴は、「音の鳴り方」を規定している特性が個体化した姿ではないだろうか。

5.2 赤の拡がりの存在論

セラーズはカルース講義全体を通じて、an expanse of redという表現が表すものを議論の要として使っている。絶対プロセスの存在論の議論では、an expanse of redで表されるものを、真性のものと認める一方で、There is an expanse of red over thereという文で表される事実は、It reds over thereという形容詞を動詞化した表現を使って言い直されることになる⁽²⁷⁾。

またそれ以前に、looks redとis redの両方に先行する原概念を想定するファースの議論を再構成する過程で、セラーズは、知覚の対象として、赤という特性をもった対象ではなく、an expanse of redと表されるものを考えることを提案している。

かくして、こうした現象は次のように想定することで救い出されると論じてみたい。赤に関わる私たちの基本的な概念は物質名詞の形をもつ。すなわち、*is red*という述定的概念は、*is an expanse of red*という形をもつ⁽²⁸⁾。

さらに、an expanse of redは、an expanse of red stuffとして理解されるべきであるとし、とりえず素材と訳しておくstuffが表しているものを、因果性の担い手として特徴付けている。

ここでの「素材」は、物理的な世界において、確定した量の素材が有する因果的役割に関わる含意を伴っている⁽²⁹⁾。

そしてさらに、an expanse of redが構成要素となっているときに、たとえばリンゴのような対象は赤いとされるのだとしている。

かくして、対象が赤いということの原概念は、対象が一定量の赤い素材

であるということである。他方で、中は白くてもリングを赤いと考える際の、**形容詞的な意味**での対象が赤いということの概念は、より複雑なものであるだろう。異なった色の複数の拡がりがあり、同一の対象の構成要素となり得る⁽³⁰⁾。

こうした議論で an expanse of red と表現されているものは、絶対プロセスそのものではないにせよ、存在論的分析での前段階にあたるものとみなして構わないだろう。そして、この段階で、特性と不可分で、因果的役割を持ち、部分的である、といった個体化した特性の特徴が現れているのは、注目に値するように思う。

5.3 絶対プロセスの瞬間性

伝統的に理解された実体の大きな特徴は、それが偶有的な変化を被りながらも、時間の中で持続的に存在するということである。これに対して、絶対プロセスは時間的な持続をもたない。

私たちは次のように問いかける誘惑にかられる。おそらく、ある時点でのCシャーピング【Cシャープの音の鳴り】に關与する事柄は、**瞬間的なCシャーピング**だけなのではないか⁽³¹⁾。

ただし、瞬間的というのは少し語弊があり、本当は連続性が要求される。

基層となっている真実は、絶対プロセスの**進み行くことは、連続的な生成と消滅**という考えを要求するということである⁽³²⁾。

セラーズによれば、過去から現在に拡がるプロセスと思えるものは、過去の記憶が次々と連なっていくことで形成される感覚的な構成物を、概念的に実際の事実として誤認したものにすぎない。

こうした考え方は、いわゆる実体にあたる個体を、個体化した特性の束として理解する存在論的な立場にとつては、自然なものであるだろう。一つのプロセスが特性を変えることで変化するのではなく、変化とは次々と生まれては消えるプロセスの連なりなのである⁽³³⁾。

5.4 絶対プロセスの重層性

個体化した特性を基本とする立場では、ソクラテスのような個体が備えている特性の一部を抜き出して形成される束も、個体として認められるとした。これは、反対方向で考えると、複数の個体化した特性の重ね合わせを認めるということでもある。セラーズは、絶対プロセスの存在論の利点として、まさにこの重ね合わせ可能性によって、心身問題が解消されるように見えるという点を挙げている⁽³⁴⁾。

セラーズの議論は二段構えとなっている。まず、いわゆる科学的説明においても、観察される赤い拡がり、物質を構成する粒子が個々に持つ特性だけから説明されるわけではなく、構造化された粒子の集まりが全体として現出させるものであるように思える。この全体として現出するものを、実体の存在論から理解することができるのか、という疑問が提示される。

これに対する答えとして、デカルトにならって、観察される赤い拡がりを心的なものとした場合でも、それを物質的な粒子からなる中枢神経系と、どう関係づけるのかという形で、同様の疑問が生じてくる。

赤い拡がりも、その心的な代替物も、物質的な粒子も、すべて絶対プロセスであり、絶対プロセスの重ね合わせによって世界が形成されているとしてしまえば、上記のような点で困難を感じることはなくなるのではないか、というのがセラーズの主張である⁽³⁵⁾。

6 問題の行方

存在論の妥当性を判定する一つの大きな基準は、それが全体として、世界

についてどれだけ整合的で、包括的な理解をあたえるかにあるだろう。絶対プロセスの存在論は、現行の科学がそのままで支持するものであるわけではなく、将来の科学に期待されるべきものだ、とセラーズはしている⁽³⁶⁾。

しかしそれでも、将来の科学が現行の科学の延長線上にあると想定する限りでは、現行の科学の中に、セラーズ的な存在論を支持するなんらかの要素が現れているのかを問うてみるのは有益だと思う。とりわけ、存在論的には謎めいたままにとどまっている量子力学の文脈で、絶対プロセスの存在論が有用ではないかを考えてみることは、大いに意義があるだろう。

これとは別に、重ね合わせ可能な絶対プロセスを基本とする立場は、生物の「活動パターン」を、そのままに記述すること許す立場でもあるように思える。そうした意味で、この立場は、倫理学での徳倫理学と親和性が高いのではないだろうか。たとえば、「善」を生物固有のライフサイクルにおける機能の観点から理解しようとするフットの試みと、絶対プロセスの存在論はどこか通じるところがある⁽³⁷⁾。

(1) カルース講義は、アメリカ哲学会の総会での講演であり、三つの講義からなる。セラーズのカルース講義は、全体としては“Foundations for a Metaphysics of Pure Process”という表題をもち、*The Monist*, Vol. 64, No. 1, (January 1981)で公刊されている。第一講義“The Lever of Archimedes”を、以下ではSellars [1981a]で参照する。第二講義“Naturalism and Process”はSellars [1981b]で参照する。第三講義“Is Consciousness Physical”はSellars [1981c]とする。

(2) Jorge J. E. Gracia, *Individuality*, State University of New York Press (1988).

(3) Sellars [1981b], op. cit., pp. 39-43.

(4) Ibid., p. 43.

(5) Ibid., p. 43. 「次の節で考察する限定」とは、時間的な前後は、対象のあいだに存立する関係ではないという主張である。原文でのイタリック体をゴシック体になっている。以下でも同様にする。

(6) Ibid., pp. 46-53.

(7) Ibid., p. 48.

(8) Ibid., p. 49. 隅付き括弧内の語句は、訳者の補足である。

(9) Ibid., p. 49.

(10) Ibid., pp. 49-51.

(11) Ibid., p. 57.

- (12) Gracia, op. cit. の第2章による。
- (13) 詳しくは、ibid., pp. 70-82を参照。
- (14) Ibid., p. 82.
- (15) Ibid., p. 93.
- (16) 詳しくは、Gracia, op. cit. の第1章を参照。
- (17) トロープに関する議論は活発になっていると思われるが、一例としてKeith Campbell, *Abstract Particulars*, Basil Blackwell (1990)だけを挙げておく。批判としては、Chris Daly, "Tropes," *Proceedings of the Aristotelian Society*, New Series, Vol. 94 (1994), pp. 253-261がある。
- (18) P. F. Strawson, *Individuals*, Methuen (1959). また、白旗優「特性配置陳述と個物の問題」『アルケー2002』、関西哲学会年報No.10、関西哲学会編、京都大学学術出版会、(2002)、pp. 62-75も参照。
- (19) Gracia, op. cit., p. 97.
- (20) 個体化した特性の束は、普遍である特性の束が、束として個体化した姿であるか、あるいは、あらかじめ個体化している特性が形成する束であるか、のいずれかとなるだろうが、あまり相違はないように思う。一応は後者としておく。
- (21) Gracia, op. cit., p. 151.
- (22) アリストレス的とされる実体についての理解では、実体は種に属し、種は定義によって定まる。種の定義に含まれる特性は本性とか性質と呼ばれる。本質といってもよい、種の定義に含まれないが、個々の実体がもつ特性は偶有性と呼ばれる。
- (23) 人間によって体験される限りでの経験的世界ということではなく、感覚可能な、具体的な物から成っている世界ということである。また、可能世界は、それが論理的に無矛盾なもの、もしくは物理法則に反しないもの、とされる限りでは、現実世界の可能な特性として理解した方が良いように思う。現実世界に因果的な影響を及ぼす可能世界は、むしろ現実世界の一部として理解できるだろう。また、グラシアは、個性は「様態」であるとし、個体化の原理は「存在」であるとしているが、その表現上の機微はともあれ、実質的にはここで述べている見解とあまり変わらないようにも思う。
- (24) 時空および時空的構造の存在論的性格という問題はあるが、それらは棚上げにしておく。また、グラシアが時空での位置を有しない個体の例としている「天使」、「神」、特定の誰かの「思考」などは議論に含めない。
- (25) 局所的時空構造は、全体の時空構造に埋め込み可能な構造であるが、それがどこに埋め込まれるかについては、特定されていないとしている。
- (26) トマスが個体化の原理とした「限定された【3つの】次元のもとで考察されている質料」も、以上の議論に通じるところがあるように思える。トマス・アキナス「存在者

と本質について」『中世思想原典集成14トマス・アキナス』、上智大学中世思想研究所
監修、山本耕平編訳、平凡社（1993）、p. 78から引用した。

- (27) Sellars [1981b], op. cit., p. 56.
- (28) Sellars [1981a], op. cit., p. 12.
- (29) Ibid., p. 12.
- (30) Ibid., p. 14.
- (31) Sellars [1981b], op. cit., p. 58. 隅付き括弧内の語句は、訳者の補足である。
- (32) Ibid., p. 59.
- (33) ストロークソンも、特性的普遍の現れは、異なる時空点で同一性を保持するようなもの
ではないとしている。Strawson, op. cit. および白旗の上掲論文を参照。また、現象学的
な伝統での時間論との親近性は明らかだろう。
- (34) Sellars [1981c], op. cit.
- (35) これは大森荘蔵の主張でもあった。大森荘蔵『知の構築とその呪縛』、ちくま学芸文
庫、筑摩書房（1994）。
- (36) Sellars [1981c], op. cit., pp. 85-88. この点については、Johanna Seibt, *Properties as
Processes*, Ridgeview Publishing Digital (1990)の第9章も参照。
- (37) Philippa Foot, *Natural Goodness*, Oxford University Press (2001).